様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２６５４

研究課題名（和文）正課内外・キャンパス内外に拡張された大学教育の社会的レリバンスを探る探索的研究

研究課題名（英文）An exploratory study to explore the social relevance of university education extended inside and outside the regular curriculum, on and off campus

研究代表者
高澤　陽二郎（Takasawa, Yojiro）

新潟大学・人文社会科学系・助教

研究者番号：１０７９４３１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：留学・インターンシップ・地域貢献活動・オンライン上の交流など、通常の授業に加えて大学の正課内外・キャンパス内外の多様な場を行き来する現代の大学生自身が、それらをどう相互に関連づけて自らの学びへと繋げているのか、本研究ではその実態と学生の意味づけの過程を明らかにした。
さらに今後一層求められる社会人の学び直しや自律的なキャリア形成には、そうした学びの機会を自ら見定めて関わっていく思考・行動特性が不可欠であり、その獲得の程度を評価する尺度を新たに作成した。
実際の若手社会人を対象としたアンケート調査では、大学時代のそうした特性の確立が、仕事での望ましい行動をもたらしていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の意義は、豊富な大学生インタビュー調査の結果から多様化する我が国の大学生の学びと成長の実態を捉え、大学（教職員）がどのような思考・行動の発達を学生に対して促すことが将来社会での活躍という成果に繋がるのか、その一端を明らかにしたことにある。得られた知見は、既存の大学生の成長理論や概念とも関連を持ちながら、学生の成長に影響を及ぼす具体的な思考・行動特性を示しており、今後の大学での学生支援・学修支援施策にも示唆を与えるものである。
また定量的調査のために、そうした思考・行動特性を評価する新たな尺度を作成したことも、大学－社会の接続を探る今後のトランジション研究の進展へ寄与するものとなろう。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the actual situation and students' meaning-making process of how modern university students, who participate in a variety of experiences inside and outside of regular curriculum and on and off campus, such as study abroad, internships, community service activities, and online exchanges, relate these experiences to each other and to their own learning.
In addition, we developed a new scale to evaluate the degree of acquisition of these characteristics, which are essential for the relearning and autonomous career development of working adults, who will be required to identify such learning opportunities on their own.
A questionnaire survey of young working adults suggested that the establishment of such characteristics during their university years leads to desirable behavior at work.

研究分野：高等教育学

キーワード：大学生の学び・成長　大学生活と仕事との繋がり　ラーニング・ブリッジング　学生エンゲージメント　正課外活動　大学－社会へのトランジション　キャリア形成

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究では、昨今の我が国の大学生を取り巻く特徴的な状況の１つである「正課内外・キャンパス内外の多様な文脈を行き来する学生時代」の経験の特徴と、その影響に焦点を当てた。教室・研究室で学ぶだけでなく、キャンパス外の様々なフィールドを舞台とした実習や社会体験（留学、インターンシップ、地域でのプロジェクト型実習など）は、いまや大学での正課のカリキュラム内にも多く取り入れられている。またサークルや部活動、アルバイトなどの従来からよく認識されてきた正課外活動の他にも、大学の準正課活動として行われるプロジェクト型の活動、正課外で学生が携わる学び・経験の場やコミュニティは無数にあり、学生が在学中にかかわる活動の場面は多様化してきている。また最近では、様々なコンテンツのオンライン化も進み、物理的な制約を越えて、学生が世界中の学びの資源にアクセスすることも可能となった。

(2) 多くの学生は在学中、そうした多様な学び・経験の機会に同時並行で取り組む。これまで、正課の授業での学修成果を問う研究や、それ以外の個別の活動の効果に着目した調査研究は数多く蓄積されているが、それら多様な文脈を日常的に往還する我が国の大学生の包括的な成長を捉えるための知見は不十分である。また、米国の高等教育研究において大学生の成長理論が多く提示・活用されているのに対し、我が国の大学教育研究の中では、まだそうした理論と実際の学生の動態とを関連づけた研究が十分ではない。

(3) 大学生－職業人のトランジションを扱う研究領域において、近年では、大学時代の経験変数をより詳細に設定し、卒業後の職業人生活に及ぼす大学での学び・経験の効果をより解像度高く捉えようとする研究が進展している。

２．研究の目的

本研究では、正課内外・キャンパス内外の多様な文脈を行き来する現代の大学生が、そうした多様な学び・経験の機会にどのように関与し、複数の文脈から得る学びを相互にどう関連づけていくのか、そしてそれが職業人としての初期キャリアの段階で発揮する思考・行動特性へとどう接続されていくのか、その実態を明らかにすることを目的とする。研究のアプローチとして質的・量的調査の双方を用いて、また調査対象者個々の具体的な記述とそれを意味づける理論の両面から、上記の問いに迫っていく。

大学生活の社会的レリバンスとして得られる知見は、変化の激しい社会動向とよりダイレクトに接続した教育・学習が期待される近年の大学教育改革の流れの中で、大学教育・学生支援への実践的な示唆をもたらすものとなりうる。

３．研究の方法

(1) 本研究で援用する重要な概念は以下の通りである。

「学生エンゲージメント」は、学生本人の学習への能動的な関与、（学生に対する）教職員の関与の質と量などを捉える概念であり、学習の成果（アウトカム）を生むプロセスにある学習経験に焦点を当てたものである（山田 2018）。本研究では、学生の心理的発達や学習成果に効果をもたらすとされる学生エンゲージメントの重要性を認識したうえで、複数の場面を越えて発揮される、学び・経験の機会への関与のあり方に着目する。河井（2012）は、複数の場面における学習を架橋することを「ラーニング・ブリッジング」として概念化した。本研究では同概念をもとに、特に「正課の教室での学び」と「それ以外にキャンパス外・正課外で関わる諸活動」との間の架橋の実態について取り上げる。

(2) 調査①「大学 3・4 年次学生へのインタビュー調査」：キャンパスでの授業とともにそれとは文脈の異なる場面で一定程度の時間を費やして学びを得た経験を持つ大学 3・4 年生 30 名（9 大学）を対象に半構造化インタビュー（1 人 60 分程度）を行った。調査対象者は、所属大学の属性・専攻分野・取組んできた活動の種類等のバランスに配慮し、複数大学の教職員からの紹介とスノーボールサンプリングによって選定した。インタビュー・データからトランスクリプトを作成して分析に用いた。このデータの分析からは以下 2 つの内容に関する学生の発言を抽出した。

① 「教室外で学生が関わった諸活動での経験」と「教室での正課の学び」との関連づけ
② ①の発言から遡及して、その意味づけ（関連づけ）に至った要因として解釈できる本人の学習・活動への関与

抽出した発言は、カテゴリーを作成して分類し、分類の信頼性を確認するために他研究者にも同様の分類作業を依頼し、コーエンのκ係数を用いてその一致率を確認した。

(3) 調査②「若手社会人へのアンケート調査」：調査①で明らかとなった、大学生活での正課内外のラーニング・ブリッジングを促す学習・活動への関与（「学生エンゲージメント for LB」と

命名）という概念を中心に据えた調査分析を行った。同概念を定量的に評価するため調査項目を作成し、大学 4 年生 188 名への予備調査での検討を経て、3 因子 12 項目からなる尺度を作成した。続いて、同尺度を用いて初期キャリアの段階にある社会人への質問紙調査を実施した。調査はインターネット調査会社（アイブリッジ（株））のモニターを対象にスクリーニングを行い、回答時点で 24～26 歳で大学（学部）を最終学歴とする卒業後 3～4 年目の正社員・公務員を対象に WEB 上で実施し、850 名の有効回答を得た。調査分析では、これまでのトランジション研究で扱われてきた大学生活及び仕事での思考行動特性を示す諸変数と学生エンゲージメント for LB との関係を、統計的分析により明らかにした（図 1）。

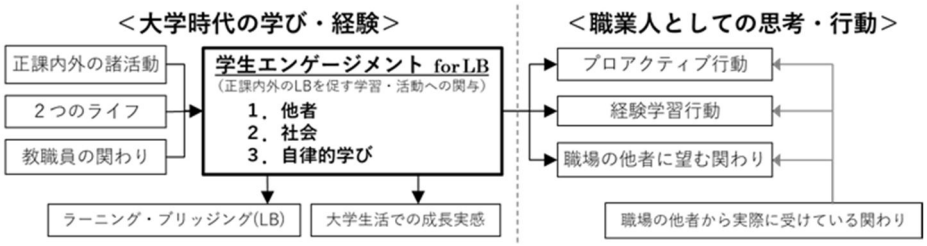

図 1 【調査②】調査分析の枠組

４．研究成果

(1)【主に調査①から】「教室での正課の学び」と「教室外で学生が関わった諸活動（正課内外双方を含む）での経験」との間のつながり（ラーニング・ブリッジング）に着目し、そこに学生自身が見出す学びの架橋のありようを探索的に明らかにした。分析の結果、学びの架橋のパターンを示す以下の 4 つのカテゴリー及び複数のサブカテゴリーが抽出された（図 2）。

①場面を越えた知識・スキル・態度の活用
②社会・他者との関わりを通じた学習者としての基盤強化
③将来のキャリアの見通しと現在の学習・諸経験との関連づけ
④多様な学習資源の意味づけと主体的な選択

これらはまた，７つのベクトル理論など米国の高等教育で一定の評価を得てきた大学生の成長理論とも多くの関連が見出せた（高澤・松井 2021）。

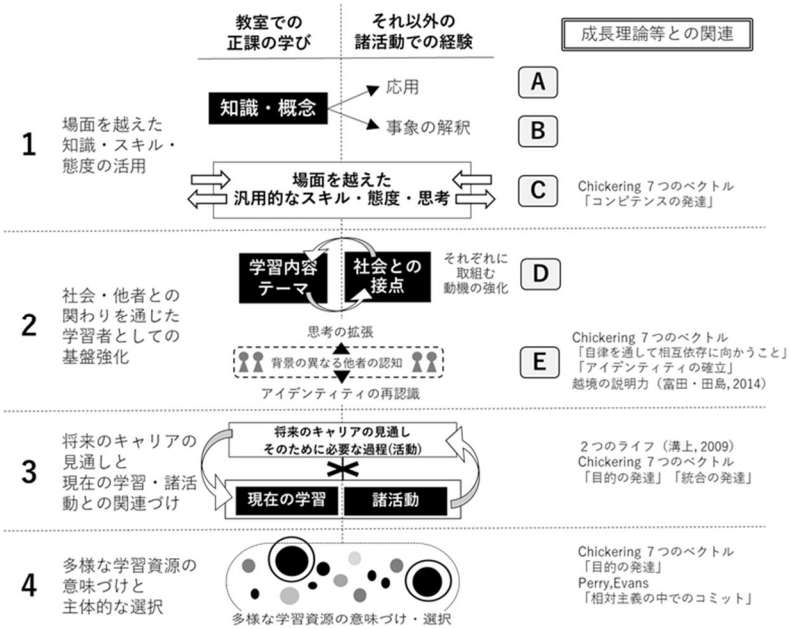

図 2 教室での正課の学びとそれ以外の諸活動での経験との関連づけのパターン

(2)【主に調査①から】上記(1)で見出された、場面を越えた学びの関連づけや学習行動（ラーニング・ブリッジング）を発達させる基盤的要因（学習・活動への関与のあり方）に着目し、インタビュー調査の分析から、学生エンゲージメントの概念を援用してそれらを明らかにすることを試みた。その結果、学習・活動への関与のあり方として以下の 4 つのカテゴリー及び複数のサブカテゴリーが抽出された。

①ある学び・活動への量的・質的に深い関わり
②1 つの活動の枠を越えた経験学習の実行
③大学・学部内にとどまらない多様性の経験

④自らが学ぶ分野の特徴の認識と関連づけ

更にこれらのカテゴリーと、それが要因となって促されるラーニング・ブリッジングの意味づけのパターンとの間の対応関係について仮説を提示した（図 3）（高澤・松井 2023）。

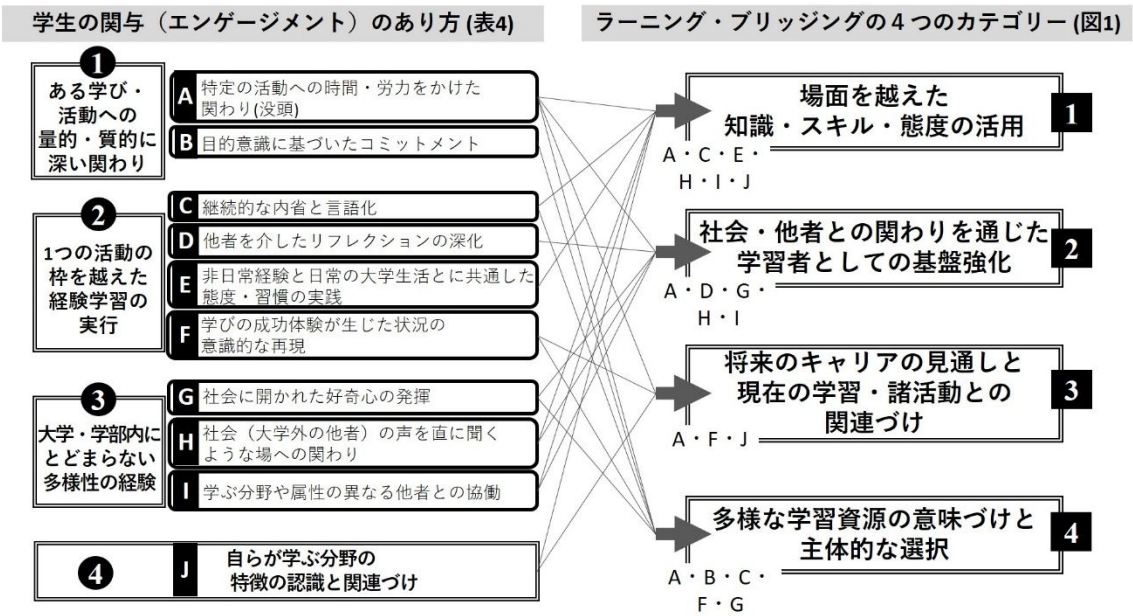

図 3 「正課内外のラーニング・ブリッジングを促す学習・活動への関与」と
ラーニング・ブリッジングの各パターンとの対応

(3) 【主に調査②から】上記(2)で見出された、大学生活での正課内外のラーニング・ブリッジングを促す学習・活動への関与をあらわす概念を「学生エンゲージメント for LB」と命名し、それを定量的に評価するため、3 因子（他者・社会・自律的学び）12 項目からなる尺度を作成した（表 1）（高澤・松井 2024）。

表 1 「学生エンゲージメント for LB」探索的因子分析の結果（n=188）

項目	平均	SD	因子負荷量 1	因子負荷量 2	因子負荷量 3
第1因子：他者（α=.784）					
自分に対する他人からの指摘や評価をよく聞き、受け入れてきた	3.69	0.91	**.77**	-.11	.04
様々な場面で、自分の考えが他人にうまく伝わるように試行錯誤した	3.74	0.94	**.66**	-.07	.07
組織やグループの一員として、ある目標や課題達成を目指して活動した	3.79	1.03	**.60**	.04	-.03
自分の理解が及ばないことは積極的に他人に質問したり、教えを請うたりした	3.67	1.03	**.57**	.16	.04
まじめな話題について友人等と真剣に話す機会があった	3.76	1.02	**.48**	.26	-.09
第2因子：社会（α=.729）					
普段つき合う友人や大学のキャンパスから離れて、新しい世界にふれる経験をした	3.21	1.25	.04	**.78**	-.21
キャンパスの外の実社会との接点を通じて、学びの興味を広げた	3.32	1.16	-.14	**.63**	.15
大学以外の経験や学びの機会を、自分の関心に沿って積極的に活用した	3.56	1.11	.07	**.54**	.20
自分以外の他人、組織、社会に影響を与えようと考えて行動した	3.11	1.15	.20	**.42**	.04
第3因子：自律的学び（α=.665）					
自分で決めたルールや習慣を一定の間継続した	3.65	1.05	-.10	.09	**.80**
自分の目標や理想の実現に向けて計画的に学習や活動を進めた	3.67	1.00	.21	-.17	**.64**
経験から自分が感じたことや学んだことを、後から振り返って考えた	3.66	1.00	.02	.25	**.35**

因子間相関	因子1	因子2	因子3
因子1	-	.58	.58
因子2		-	.45
因子3			-

(4) 【主に調査②から】上記(3)で作成した学生エンゲージメント for LB 尺度を用いたアンケート調査・統計的分析（図 1 参照）から得られた知見（高澤・松井 2024）を以下に示す。

①学生エンゲージメント for LB と大学生活の諸要因との関係では、入試難易度・学業成績といった要因との関わりは相対的に弱く、それ以上にキャリア意識・行動が顕在化し、教職

員との関わりが強くあるほど、他者・社会・自律的学びを志向する行動（学生エンゲージメント for LB の三因子）が発揮されていることが示唆された。また正課の学習活動のみ、サークルや部活動のみといった学生よりも、正課内外・大学内外の活動をバランスよく経験してそれを意味づけられている学生ほど上記の行動を経験していることも示された。

②学生エンゲージメント for LB がもたらす職業人としての思考行動特性への影響については、大学生活の他変数と比較した際に顕著にその影響が大きいとまでは言えないが、一定の正の効果をもつことが示唆された。特に他者因子は、他者と深く関わることで自分自身や成果のアップデートを図るという大学生活での経験の蓄積が、職場での他者への期待値を向上させるだけでなく、職場での経験学習行動やプロアクティブ行動にも作用している点が注目される。同因子を構成する項目にあるように、大学生活で出会う多様な他者を、一方的に知識を伝達される存在としてだけでなく、身近なコミュニケーション機会を通じて自身の学び・成長に影響を与える存在、1 人では到達できない成果をともに目指し得る存在と捉える他者観の発達がその背景にはあると推測される。それが大学生活での LB を促す（高澤・松井 2023）とともに、仕事では例えば経験学習行動におけるチャレンジングな経験への挑戦を後押しし、他者を介した内省を充実させていることが考えられる。この他者因子のような関与のあり方は一見、高等教育の学修者として自明のことのようだが、アクティブラーニング型の授業等の前提として、こうした他者を介して学ぶマインドセットの定着が重要である。

次に社会因子は、思考・行動の範囲を大学外の世界に広げることを示すものだが、それは結果的にキャンパスの自分の周辺にのみあった世界を相対化し、場面間の LB を促す（高澤・松井 2023）。キャリア意識からの行動などその契機は様々であっても、そうした外へのアクションから新たな学びが得られた大学生活での成功体験が、職業人生活においても、フィードバック探索やネットワーク構築のようなプロアクティブ行動へと繋がっていることが推測される。

自律的学び因子は主体的な学びや内省、習慣の継続を示しており、職場でのプロアクティブ行動に正の効果が見られたほか、経験学習行動との一定の関係も予想されたが、今回の分析ではそこに有意な影響は確認できなかった。ただ、この結果だけをもって自律的学び因子のもつ効果を評価するには慎重である必要がある。本調査で対象とした初期キャリアの段階からさらに就業経験を経て、ある程度自らの仕事のスタイルを確立し、キャリアの転機を迎えるようなタイミングにおいて、職業人としての学び直しや継続的な能力向上に自律的学び因子が寄与する可能性は十分に検討される余地がある。

以上、本研究では、正課内外・キャンパス内外の多様な文脈を行き来する大学生の学び・経験の実態とその効果を、先行する理論・概念と対照させつつ検討することで、学生の学びと成長研究に新たな視角を提示した。さらに、それが初期キャリアの思考行動特性に及ぼす影響について、Education2030 プロジェクト（OECD 2019）、人生 100 年時代の社会人基礎力（経済産業省 2018）といった今後の社会で求められる能力の議論とも重ね合わせながら調査結果の分析と考察を行い、本研究で提唱した概念「学生エンゲージメント for LB」のトランジション研究における意義や位置づけを明らかにした。

＜引用文献＞

河井亨（2012）「学生の学習と成長に対する授業外実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングの役割」『日本教育工学会論文誌』35(4): 297-308.

経済産業省（2018）『人生 100 年時代の社会人基礎力について』(https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html)

OECD（2019）“The OECD Learning Compass 2030” (https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/)

高澤陽二郎・松井賢二（2021）「正課内外での複数の文脈を経験した大学生の学びの意味づけに関する探索的検討－大学生の成長理論に照らして」『大学教育学会誌』43(2): 60-69.

高澤陽二郎・松井賢二（2023）「正課内外を架橋するラーニング・ブリッジングの推進要因－学生エンゲージメントの観点で」『名古屋高等教育研究』23: 391-414.

高澤陽二郎・松井賢二（2024）「大学生活での学習・活動への関与が初期キャリアの思考行動特性へ及ぼす影響」『名古屋高等教育研究』24: 155-180.

山田剛史（2018）「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『名古屋高等教育研究』18: 155-176.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 高澤 陽二郎	４．巻 26
２．論文標題 低学年次のインターンシップ経験によってもたらされる能力観の変化	５．発行年 2023年
３．雑誌名 インターンシップ研究年報	６．最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24497/jsiwil.26.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高澤 陽二郎、松井 賢二	４．巻 24
２．論文標題 大学生活での学習・活動への関与が初期キャリアの思考行動特性へ及ぼす影響	５．発行年 2024年
３．雑誌名 名古屋高等教育研究	６．最初と最後の頁 155～180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/njhe.24.155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高澤 陽二郎、松井 賢二	４．巻 23
２．論文標題 正課内外を架橋するラーニング・ブリッジングの推進要因 ： 学生エンゲージメントの観点で	５．発行年 2023年
３．雑誌名 名古屋高等教育研究	６．最初と最後の頁 391～414
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/njhe.23.391	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高澤陽二郎、松井賢二	４．巻 43(2)
２．論文標題 正課内外での複数の文脈を経験した大学生の学びの意味づけに関する探索的検討 － 大学生の成長理論に照らして －	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大学教育学会誌	６．最初と最後の頁 60-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松井　賢二 (Matsui Kenji)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関